

ブラジルの図書館と都市社会運動

近田亮平

●ブラジルの図書館の起源

ブラジルの「発見」は一五〇〇年であるが、ポルトガル王室がブラジルに到着する一八〇八年まで、印刷・出版は禁止されており、「大学の設立や印刷機の導入はもとより、自立的な知的生産を促す恐れのあるものは一切許されなかった」（参考文献③）。しかし、既に一六世紀頃から修道院や個人収集家による私的な図書館の存在が記録されており、植民地ブラジルにおけるインテリ階層の形成に寄与することとなった。

そして、前述のポルトガル王室のリオデジャネイロ（以下リオ）到着から三年後の一八一一年に、ようやくブラジルで初の公立図書館が二つ正式に設立された。一つはポルトガルの王室図書館を移転させた現在のリオの国立図書館で、もう一つは植民地の総督府が置かれていたサルヴァドールに設置された。

●近年のブラジルの教育普及と図書館

近年のブラジルでは、就学及び進学率の

向上や学校外教育の普及といった教育状況の改善が見られている。このような就学者や教育ニーズの増加に対応すべく、政府は学校や地方自治体における図書館の増設と質的向上に努めてきた。

「全国書籍出版組合」（SNELE）によると、二〇〇三年に登録されている図書館は、地方自治体等のものが約五〇〇〇（「市」にあたる地方行政区「ムニシピオ」の数は五五六三）、NGO等が所有するものが約一〇〇〇あるとされる。また、教育省「国立教育研究所」（INEP）の二〇〇四年「学校センサス」によると、公立私立を合わせた基礎教育（〇～一七歳を対象とした教育及び識字等の特別教育）機関には五万二九三二の図書館が設置されている。大学等の高等教育機関は一八五九あり（二〇〇三年）、これらのほとんどが一つ以上の図書館を所有している。更に、ブラジルの図書館の特徴として、インターネットでの検索や文献のダウンロード等のサービスが進んでいることが挙げられる。

ブラジルでは経済が安定した一九九〇年代半ば以降、政府による社会政策が功を奏

したこともあり、教育の普及とともに図書館の質及び量的な改善が見られている。しかし、学校や研究機関に付属する図書館の多くが一般市民には公開されていない。また、各ムニシピオへの図書館設置はほぼ達成されているが、ブラジルのムニシピオは地理的にかなり広く、交通の便やコスト等を考えると誰もが気軽に公立図書館を利用できるわけではない。インターネットのサービスも学術的なものが主流で、しかも会員制である場合が多い。したがって、ブラジルの一般市民、特により貧困な階層の人々にとっては、依然として図書館は身近な存在であるとは言い難い。

しかし、近年、特に一九九〇年代以降のブラジルの都市部では、これらの問題を克服し、より貧困な階層の人々も図書館を利用できるような民衆側からの積極的な取り組みが行われている。この取り組みを紹介する前に、その起源となったブラジルの都市社会運動の変遷を概観する。

●ブラジルの都市社会運動の変遷

様々な領域における不平等を特徴とする

ブラジル社会では、自らの生活の向上を可能とする資源へのアクセスから排除されてきた人々により、主に都市部において社会運動が活発に展開されてきた。彼らは、共通の利害関係を持つ人々と相互扶助や連帯関係を築き、社会運動という形で政府に自らの要求を訴えることにより、それぞれの目的達成を試みてきた。

このようなブラジルの社会運動は、植民地・帝政時代の奴隷解放や独立運動等が始まりとされる。そして、一九世紀半ば以降になると、ヨーロッパをはじめ海外からの移民同胞による相互扶助団体が結成されるようになった。更に、二〇世紀に入り近代工業化が進むにつれ、労働組合などの職種や職場をベースとした団体が結成されるとともに、急激な都市化に伴う劣悪な居住環境や農地問題の改善を訴える団体が結成され、それぞれ独自の運動を展開してきた。

その後、一九六四～八四年までの軍事政権下では、キリスト教団体の影響を受けた貧困克服や反政府、再民主化運動等が活発化した。そして、一九八〇年代以降になると今までの社会運動に加え、海外NGO等とのネットワークを持ち、貧困、環境保全、女性、人権等の問題の改善に取り組む「新たな社会運動」が展開されるようになった。

●「市民であることの権利」の主張と浸透

その後、主に一九九〇年代頃から、ブラ

ジルの社会運動において「市民であることの権利」(cidadania) が強く主張されるようになった。このことは、既存の社会の中で排除されている人々は、同じ社会を構成する全ての人に与えられている「市民であることの権利」が実現されていない状況にあり、「権利」という観点から自らの困難な状況の改善を主張するものである。

そして、ブラジルの社会運動は普遍的な「市民であることの権利」を掲げることにより、社会の中で排除されている一部の人々の問題ではなく、その社会を構成する全ての人々に共有されるべき問題として認識され、より多くの人々が何らかの形で活動に参加するようになった。このことが、一九九〇年代以降の大きな変化の一つといえる。そして、より多くの人々の参加をもとに、近年の社会運動は今までのような政府への要求運動に留まらず、国際ネットワークやメディア等を活用し、政府をはじめ様々な社会のアクターと交渉を行うようになってきている。つまり、ブラジルの社会運動は「民衆」だけに留まらぬ「市民」運動として発展を遂げつつあるといえる。

●「コミュニティ図書館にみる不平等是正と貧困削減の可能性」

徐々にはあるが、ブラジルの社会運動の団体は、より多くの人々の参加をもとに政府やNGO等との交渉を行い、資金や技術援助を獲得し得るようになってきている。

そして、これらの援助をもとにした活動の一つに、次項で紹介するコミュニティ図書館が挙げられる(同コミュニティ等の詳細については、参考文献①と②を参照)。

近年のブラジルでは「世界社会フォーラム」の開催や、地方レベルの政策決定過程に一般市民の代表が参加する市民審議会の設置等、社会運動と関連した市民団体が影響力と重要性を増してきているといえよう。最近発表された民間及び政府の調査では、ブラジルの不平等及び貧困は減少傾向にあるとされる。本稿及び次項で紹介するコミュニティ図書館等の試みに、今後の更なる不平等是正と貧困削減の一つの可能性を見出すことができるのではなからうか。

(こなた りょうへい／アジア経済研究所 在リオデジャネイロ海外派遣員)

《主要参考文献》

- ① 近田亮平「途上国の貧困削減を可能とするエンパワーメント」佐藤寛編『援助とエンパワーメント―能力開発と社会環境変化の組み合わせ』アジア経済研究所 二〇〇五年。
- ② 近田亮平「ブラジルの民衆運動―サンパウロの住宅運動団体を中心に」(『ラテンアメリカレポート』第二二巻第二号、二〇〇五年)。
- ③ シッコ・アレンカール他(鈴木茂他訳)『ブラジルの歴史―ブラジル高校歴史教科書』明石書店、二〇〇三年。